



Title	追悼 田中弘先生
Author(s)	内藤, 一志
Citation	語学文学, 34: 1-1
Issue Date	1996
URL	http://s-ir.sap.hokkyodai.ac.jp/dspace/handle/123456789/8362
Rights	本文ファイルはNIIから提供されたものである。

追悼 田中 弘先生

内 藤 一 志

桜前線が例年より早く函館に上陸した四月三十日、先生の訃報がもたらされた。

二十七日に函館校の国語教室と英語教室の教官による歓迎会に出席いただき、その折にはこれからの抱負を元気に語っていらっしやったのである。翌日先生は所用で埼玉県鶴ヶ島市のご自宅に帰られ、翌々日には急性心停止で急逝された。晴天の霹靂という言葉そのまま、私どもはその知らせをしばらく信じることができなかった。

先生はこの四月一日付けで、筑波大学附属小学校から北海道教育大学教授として函館校に赴任なさった。先生は三十余年にも及ぶ長い間、小学校教育の第一線で豊かな経験を積んでこられた。我が国の初等教育を明治より先導し続けている筑波大附属小の国語科の指導者をお迎えできたのは非常に幸運であり、その貴重な経験を本学の学生、院生にご伝授頂くことが私どもの願いであった。最初の講義を終えられて、いかがでしたと伺ったところ、「ちょっと緊張したけれど、学生が熱心に聞いてくれてうれしいですね」と笑顔で話していらっしやった。ややしやがれた声で、ゆっくりとやさしく語る口調に学生たちは「ところが暖かになる感じ」と喜んでいた。これまでの大学教官にはない雰囲気でも早くも学生の心を掴んでいらっしやったのである。

陽に焼けていて優しい笑顔、その笑顔そのままの口調。この三月迄小学二年生の担任をなさっていたのである。葬儀の折、前日の通夜では、

小学生の泣きじゃくる声でいたたまれなかったということを参列の方から伺った。大好きだった先生を子供たちから奪い取ったような、言いようのない重く、苦しい心持ちであった。教え子や同僚の方達から「たなせん」と愛称でよばれていたこともその時知った。葬儀で披露される弔辞から、私どもが知らない先生の姿が浮かび上がってくる。

私事になるが、先生を初めて拝見したのは昭和六十二年八月の日本国語教育学会の全国大会の折だった。国立教育会館の大ホール、千人の参加者を前にしステージで研究授業をなさったのである。ステージに並べられた三十余りの机、会場の備品の椅子は一年生の子供たちにはちょっと高めで、足がぶらぶらしているのが微笑ましかったのを覚えている。先生は「かんじのはなし」という授業をなさった。千人の中での授業というのに驚いた。私は四十名ほどの参観者を迎えた研究授業で、手が震え、字も満足に書けなかった苦い経験をしたばかりであった。候補者として先生のお名前があがったとき、真っ先にそのことが思い出された。先生の業績書を拝見し、多くの実践報告や授業研究、そして深い教材研究の蓄積が、あの授業を支えていたのだという思いに至った。

旅行好きで、しかも落語を演じたという先生、もっともっと、時間を共にし、教えを受けたかったーいかなともしいしいがこみ上げてくる。ご冥福をお祈り申し上げる。